

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 8 月 2 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00451

研究課題名(和文) 英語圏のレイト・モダニズムの理論と実践をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Research on the Theory and Practice of English Late Modernism

研究代表者

佐藤 元状 (SATO, Motonori)

慶應義塾大学・法学部(日吉)・教授

研究者番号：50433735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の使命は、(a)「レイト・モダニズム」の概念を同時代の時間性言説との関連の中で検証していくこと、(b)「レイト・モダニズム」の言説の歴史を検証し、その理論的な可能性の中心を探り出すこと、そして(c)「レイト・モダニズム」の歴史的プログラムの観点からブルームズベリー・グループの集合的な言説を再検証すること、の三点であった。(a)と(b)の理論的な視点と(c)の実践的な視点を交えながら、レイト・モダニズムに関する包括的な研究を行った。特筆すべき成果としては、『「ドライブ・マイ・カー」論』(共編著、慶應義塾大学出版会、2023年)が挙げられる。現代映画をモダニズムの翻訳の観点から読み解いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、(1)「レイト・モダニズム」や「長いモダニズム」などの時間性についての理論的な考察と、(2)ブルームズベリー・グループの言説についての実践的な考察の二つに大別できる。前者に関して本研究が明らかにしたのは、モダニズムの時間概念の再検証の必要性である。従来の文学史的な捉え方とは異なり、モダニズムとは、常に「遅れてやってくる」ものであり、「反復」をその原動力にしている、ということである。また後者に関して本研究が明らかにしたのは、ブルームズベリーの言説がモダニズムの翻訳空間を形作っていたということである。これらの二つの発見は、学術的にも、社会的にも大きな意義を持つ考察であろう。

研究成果の概要(英文)：The missions of this research are (a) to investigate the concept of "late modernism" in the context of the contemporary discourse on temporality, (b) to explore the theoretical possibilities of "late modernism" by means of examining the history of its discourse, and (c) to reexamine the collective discourse of the Bloomsbury Group in terms of the historical programme of "late modernism". The combination of theory and practice is the key to my research. Among many research achievements is Drive My Car: Essays on Hamaguchi's Cross-Media Vehicle (co-edited with Ryohei Tomizuka, Keio University Press, 2023). In my essay I explored this contemporary film in terms of modernist translation.

研究分野：英文学

キーワード：モダニズム レイト・モダニズム ブルームズベリー ホガース・プレス 世界文学 翻訳

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の学術的な背景としては、モダニズム研究における「時間軸」の再検証というコンテキストが横たわっている。こと英語圏のモダニズムに関して言えば、1920年代の実験的な文学運動が、モダニズム研究の特権的な研究対象となってきたが、研究領域の時間的・空間的・メディア横断的拡張を推進する2000年代以降の「新しいモダニズム研究」に後押しされるような形で、1930年代、1940年代、ひいては1950年代の、一見それほど実験的ではない文学運動もモダニズムの拡張部分として捉えられ、積極的に検証が行われるようになっていった。

本研究の柱となる「レイト・モダニズム」という問題系もまさにこうした時間軸の拡張を捉えようとして生み出されてきた概念だった。また他方で、「メタモダニズム」と呼ばれる現代文学の潮流も、本研究の視野に入っていた。メタモダニズムとは、モダニズムもしくはレイト・モダニズムの21世紀における再来として、研究者たち、批評家たちに捉えられてきたからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の三点に要約される。(a)「レイト・モダニズム」の概念を同時代の時間性の言説との関連のなかで検証していくこと、(b)「レイト・モダニズム」の言説の歴史を検証し、その理論的な可能性の中心を探り出すこと、そして(c)「レイト・モダニズム」の歴史的プログラムの観点からブルームズベリー・グループの集合的な言説を再検証することである。これまで個別に扱われる傾向にあったブルームズベリー・グループの仕事を、集合的な言説的ネットワークの編成というレイト・モダニズムの観点から立体的に捉え直す。

(a)に関して言えば、「レイト・モダニズム」は、「ハイ・モダニズム」や「アーリー・モダニズム」とどのような関係にあったのか、時間軸をめぐる大きな問いに、応答していく。(b)に関して言えば、(a)と連動する問いであるが、「遅れてきたモダニズム」という概念に含まれる「後発性」の問題をより理念的に検証していく。それはメタモダニズムについて考察する上でも大切な問いかけだからだ。(c)のブルームズベリーの再検証は、上述の二つの理論的な問いを実証的に検証していくところに大きな意味がある。

3. 研究の方法

本研究は「レイト・モダニズム」の言説に焦点を合わせ、モダニズム研究におけるこの言説の理論的な射程と実践的な可能性について、(a)「レイト・モダニズム」とその近接的時間概念の関係性についての批判的考察、(b)「レイト・モダニズム」の言説の歴史の批判的検証、(c)ブルームズベリー・グループの弁証法的プログラムとしての再配置、の三点から総合的な検証を行うが、(a)と(b)がいわば本研究の理論的な足場を支える座学的な研究だとするならば、(c)はその実践的な側面(アーカイブ研究を軸とするフィールドワーク)を担っている。

このようにレイト・モダニズムの総合的な検証を目的とする本研究においては、理論と実践のバランスが大事なものとなってくるが、昨今のコロナウィルスの状況に鑑み、英米におけるアーカイブ研究は、断念して、座学的な理論的研究に従事することにした。2020年度から2022年度がちょうど、コロナの急速的な展開と、その収束の時期に相当したことは、本研究にとっては痛手ではあった。ただし、本研究の方法的特徴は、上述の通り、理論と実践の双方の観点から、レイト・モダニズムと呼ばれる文化的概念を総合的に検証する点にあり、海外出張が叶わず、アーカイブ研究ができなくても、十分にブルームズベリー関連の資料収集は可能であり、またコロナ禍に生じた時間的な余裕を利用して、時間性に関する様々な理論書に目を通すことができたのも不幸中の幸いであった。

4. 研究成果

以下、年度ごとに本研究の研究成果について記述していく。

2020年度：

初年度は、「研究の目的」で述べた(a)(b)の二点に関して、理論書の入手および読解を進めると

ともに、(c)に関して、ブルームズベリー・グループと関わりのある複数の人物について資料収集を中心としたリサーチを進めた。そのなかでの一番の発見は、ヴァージニア・ウルフの義理の兄に相当するクライヴ・ベルが、美術批評家のみならず文芸批評家として、この文学者集団のなかで担っていた情報通としての側面である。ベルが同時代のフランスの文学者マルセル・ブルーストを高く評価し、ホガース・プレスよりブルーストに関する単著を出版していることは、文学史・文化史のなかで注目されることのない出来事である。

この発見によって、ブルーストの英訳者スコット・モンクリーの文学史的な重要性が浮上してきたため、ブルーストのグローバルな受容をめぐる国際オンライン・イベント「ブルーストと世界文学」(2020年11月14日10:00-12:00)を企画した。カリフォルニア大学のD. A. Miller、香港嶺南大学のMary Wong、東京大学の田尻芳樹、本研究代表者の佐藤が口頭発表を行った。このオンライン・イベントが本年度の研究業績の中心となるものである。

2021年度：

本年度は上述の(a)と(b)に関する研究書の読解を進めるとともに、(c)に関して具体的な介入を行なった。(a)と(b)に関しては、Rebecca Beasleyの*Russomania: Russian Culture and the Creation of British Modernism, 1881-1922.* (OUP, 2020)から多くを学んだ。この著作は、文学史の標準的なテーゼとなってきた、文学作品の芸術的な実験性をモダニズムの本質として捉える傾向を「フランス型のモダニズム」と呼び、そこからこぼれ落ちる、形式よりも内容を重視するもう一つのモダニズムの姿を浮かび上がらせ、それを「ロシア型のモダニズム」と呼んだ。そして後者に関して、ロシア文学の英語への「翻訳」がモダニズムの編成において果たした役割についても画期的な観点を打ち出した。

この外国文学の翻訳の視点と連動させるような形で、主に(a)と(c)に関して、本年度は、世界文学・語圏横断ネットワークにおいて「モダニズムの翻訳 ヴァージニア・ウルフの場合」という研究発表をした。また昨年に引き続き、オンライン・シンポジウム「Second Time Around D. A. Millerの映画批評をめぐって」を企画して、“The Secret of Reading: Hitchcock, Chabrol, D. A. Miller”という研究発表を行い、後に日本語で出版した。

2022年度：

本年度は、上記の(a)と(b)に係る論点、つまり「レイト・モダニズム」とはいかなる時間性なのか、という問いに応答するために、国際シンポジウム Drive My Car: A Symposium on Hamaguchi's Cross-Media Vehicle を6月18日に慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて開催した。アメリカ、日本、香港、台湾、韓国の研究者が一堂に集まり、濱口竜介監督の長編映画『ドライブ・マイ・カー』について議論した。この作品は、サミュエル・ベケットやチェーホフ、村上春樹のテキストを主題として扱っているため、「長いモダニズム」、もしくは「レイト・モダニズム」や「メタモダニズム」の視点からの理論的考察が求められるテキストである。私は2023年4月にこのイベントの9本の研究発表に、濱口監督本人のインタビューも含めた三つのインタビューを加えた『「ドライブ・マイ・カー」論』(慶應義塾大学出版会)を出版した。本書は、本研究全体の柱となる「レイト・モダニズム」の理論的考察が生み出した重要なスピノフである。ベケット、チェーホフ、村上という時代も文化も異なる作家たちが、日本語空間への「翻訳」を通じて、濱口の映画に出現することは、何を意味しているのか。私はこの時間性の交錯の問題系をモダニズムの「後発性」の問題と関連づけて考察した。

他方、(c)に関しては、2021年度に世界文学・語圏横断ネットワークで行った研究発表「モダニズムの翻訳 ヴァージニア・ウルフの場合」を活字化し、Australasian Modernist Studies Network 5: Cultures of Modernity, 2022においてウルフとマンスフィールドについての研究発表を行った。ブルームズベリー・グループについての考察は、「モダニズムの翻訳」という理論的な問題へと変成していった。

以上、三年間の研究成果を年度ごとにまとめたが、反省点としては、コロナ禍で致し方ないこととはいえ、海外でのアーカイブ調査が叶わなかったため、ブルームズベリー・グループの実証的研究が予定通りには進まなかったことが挙げられる。しかし、他方で、思わぬプラスの点としては、コロナ禍で生じた一人での研究時間を通じて、レイト・モダニズムという時間性の概念の理念的な考察に専念できたことが挙げられる。また本研究を通じて、ブルームズベリー・グループの実証的な考察を行うためには、「モダニズムの翻訳」という主題に取り組まなければならないことが、わかってきた。本研究期間では、十分には実践できなかったブルームズベリーの実証的な研究は、今後の課題として、私の新規の科研プロジェクト「英語モダニズムの翻訳の詩学をめぐる総合的研究」(2023-2025年度)で引き続き、取り組んでいく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐藤元状	4. 巻 34巻2号
2. 論文標題 モダニズムの翻訳ーヴァージニア・ウルフの場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 119-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤元状	4. 巻 143
2. 論文標題 読むことの秘密ーヒッチコック、シャブロール、D・A・ミラー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教養論叢	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤元状	4. 巻 840
2. 論文標題 世界文学としてのヴァージニア・ウルフ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三色旗	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Motonori Sato
2. 発表標題 To the Ends of Adaptation: The Beginnings of Translation in Hamaguchi 's Asako I & II and Drive My Car
3. 学会等名 Drive My Car: A Symposium on Hamaguchi 's Cross-Media Vehicle (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Motonori Sato
2. 発表標題 Writing as a Species of Mediumship: Woolf and Mansfield Revisited
3. 学会等名 Australasian Modernist Studies Network 5: Cultures of Modernity, 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤元状
2. 発表標題 モダニズムの翻訳 ヴァージニア・ウルフの場合
3. 学会等名 世界文学・語圏横断ネットワーク
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Motonori Sato
2. 発表標題 The Secret of Reading: Hitchcock, Chabrol, D. A. Miller
3. 学会等名 Second Time Around: On D. A. Miller 's Film Criticism (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Motonori Sato
2. 発表標題 English Proust
3. 学会等名 Proust and World Literature: A Zoom of One 's Own, Take One (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 佐藤 元状、冨塚 亮平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 『ドライブ・マイ・カー』論	

1. 著者名 レベッカ・L・ウォルコウィッツ、佐藤 元状、吉田 恭子、田尻 芳樹、秦 邦生	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 456
3. 書名 生まれつき翻訳	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Drive My Car: A Symposium on Hamaguchi 's Cross-Media Vehicle	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Second Time Around: On D. A. Miller 's Film Criticism	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Proust and World Literature: A Zoom of One 's Own, Take One	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

米国	カリフォルニア大学バークレー校			
その他の国・地域（台湾）	台湾・国立政治大学			
その他の国・地域（香港）	香港・嶺南大学			
韓国	独立研究者（明治学院大学研究員）			
その他の国・地域（香港）	香港城市大学			